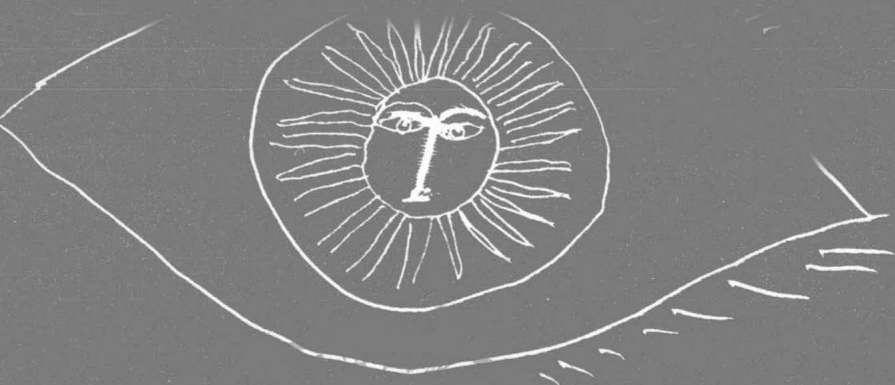


探偵女房
獅子文六



探偵女房
獅子文六

春陽堂書店

探偵女房

定価 230 円

昭和 33 年 5 月 30 日 第 1 刷発行 ©

著 者 獅 子 文 六

発行人 和 田 欣 之 介

印刷所 中央製本印刷株式会社



発行所

東京都中央区日本橋通三丁目八
電話 (27) 0051・4848・振替東京 1617

春陽堂書店

落丁・乱丁本は、本社でお取替えいたします。

目次

胡瓜夫人伝	5
断髮女中	29
今年の春外套	53
探偵女房	73
四月の蕾	91
明治正月囃	107
男の友情	119
天は晴れたり	139
松の一番	157

沈黙をどうぞ！

巴里のレニン

あとがき

装画
永田
力

229 209 185

探偵女房

胡瓜夫人伝

一

愚妻のことを、トヤカク申し述べましても、善きにつけ、悪しきにつけ、人様のお耳障りであるくらいは私も、よく承知しております。

ましてや愚妻万里子は、文字通りの愚妻でございます。私は露いささかも、謙遜なぞは致しません。それどころか、友人達は彼女のことを悪妻と呼びます。あんな女は早く叩き出してしまわんと、お前は一生ウダツが上らんよと忠告します。しかし、私はそれほどの女でもない、信じております。公平なところ、まず「愚妻」以上でなく、以下でもない女かと、考えております。

つまり、平凡にして愚劣なるわが妻のことを、根掘り葉掘り描写するなんて、純文学小説家ではあるまいし、そんな罪の深い真似は、私にはできません。第一に読者をご退屈、それから連れ

添う彼女に氣の毒でございます。

私これから申上げようとするのは、最近わが家庭に起つた一つの事件なのでございます。小なりといえども事件と名づけるものなれば、報道価値なしとは申されません。ただし、わが家庭内の出来事であり、愚妻である彼女や、宿六である私の登場致すことだけは、止む得ぬ事情として、ご勘弁願つて置きます。

さて——この一月頃でありましたろうか。私の勤務先、ホレロ本舗広告部へ、例の如く勉強堂の小僧が現われました。

勉強堂と申すのは、界限の貧弱な本屋であります。店売りだけでは心細いとみえて、小僧が新刊書などを風呂敷で背負つて、附近の銀行会社などを、行商して歩きます。これが現金買いだったら、誰も本なぞに手を出す奴はないのですが、月給日払いのお蔭で、つい小僧の口車に乗せられる時があります。それに、若いサラリー・マンというものは、おでん屋と喫茶店にばかり入れ上げてるように、世間では想像していますが、案外そうでもございません。知識に対する郷愁テナものが、まだ少しは残っています。問題の映画だとか、評判の小説だとかを知らずに過しては、どうやら寂しい氣持が致します。尤もこれは月給の安い時代に限ったもので、課長次席にでもなろうもんなら、本なぞに涕^{はな}汗もひっかけません——

「今日ア……。新刊がだいぶ出ましたよ」

と勉強堂の小僧は、遠慮会釈もなく、来客用テーブルの上に、風呂敷を展ひらげ始めました。

「駄目だよ、そう度々来たつて」

「まア、そうおっしゃらず……。ユーモア全集の今月配本を持ってきましたぜ。まだどこの書店にも出てやしません」

「ユーモア小説なんて、読んできると悲しくならア、春曉八幡鐘でも持って来い」

一しきり、エロとグロの盛んな時代には、勉強堂も、その種のことを大いに担ぎ込んだものでした。

「困るねえ、Aさんの認識不足にも……。そんな本が出せる世の中かってんだ。ちと『般若心経講義』でも読んでもらいたいもんです」

「ナマいうなよ。お経なんか、なにも本で読まなくても、お寺で食傷してるよ」

「でも今時、恋愛小説を読もうという料簡りょうかんからして、まちがってますよ。まア、谷崎源氏ぐらいで我慢して置くんですな」

勉強堂の小僧は、広告部の同僚を相手に、頻りに駄弁を弄しています。しかし、王朝時代の恋愛小説では、腹のタシにならんのか、誰も買おうという者がありません。

「ちえッ……なんか一冊、買っておくんなさいよ。『土』はどうです。映画になるんで、増刷が出来ましたよ。それから『子供の四季』の普及版が出ました」

「此奴、意地になって、色気のない本ばかり列べやがるな」

「そういう訳じゃねえけれど、当今、受けてる小説といえ、工員か子供か農民が主人公にきまつてゐるんですよ。なにもあたしのセイじゃねえや」

と遂に小僧がペソを掻き始めたので、私もおかしいやら、気の毒やら、少しヒヤかしてやろうと、テーブルの側に立ちました。そうして、二三十冊の本を、片端しから、覗いてゆくうちに、ふと一冊の背文字に眼を止めました。

「おい、小僧。こんな凄え恋愛小説を持っていながら、なぜ匿かくしとくんだと、私はいつてやりました。

「恋愛小説？ 冗談じゃないよ。それア、とても真面目な本なんですよ」

「嘘つけ。たしかに発禁か、削除を喰った筈だ」

「おかしいね。その本は、この間、文部省推薦になったんですぜ。貴方はなんか勘違いしてるんだ……。あ、そうだ、『ボヴァリイ夫人』か『チャタレイ夫人』と、一緒クタにしてるんですね」

と、小僧は、腹を抱えて笑いました。

「ハッハハ。同じ夫人でも、夫人が違いまさア。この『キュウリー夫人』てえのは、世界に名高い女科学者でね。そら、ホルモンを発明して、評判になった人でさアね」

事ここに至っては、私も中学時代の記憶を、喚び起さずにいられません。

「フザけたことをいうなよ。キュウリー夫人なら、ラジウムの発見者じゃないか……ウムそうか、あのキュウリー夫人の伝記か」

と、小僧の無学を訂正した行掛り上、私も余議なく、『キュウリー夫人伝』を取り上げて頁をめくり始めました。ひどくイットの欠乏した婦人の口絵写真版が、まず眼に入りました。

「この本も、とても売れまずぜ。掛値なしに五十版は出てますからね。子供も農民も出て来ないので、これだけ売れた本は、近來珍しいですよ」

「へえ、そんなに面白いかい」

「騙されたと思って、読んでご覧なさい。尤も、インテリ読者でないと、この面白味はわからねえでしょう」

と、小僧の奴、いやに気を持たせるようなことをいいます。どちらかというと、私もインテリ大衆の一人――

「じゃア、貰つて置こう。勘定は、来月だぜ」

二

時勢というものは、面白いものです。

小説といえ、アワヤという場面のある恋愛小説か、山の鴉が啼いたりする股旅小説でない
と、読んだ気がしなかったのは、もう五六年前の夢となりました。そういう小説が御法度になつ
ても、ならなくても、テンから面白味を感じない世の中になったんだから、豪儀なものではござ
いせんか。

(ウム、なんとこれは、面白い小説——いや伝記だ)

と、私は、貪るように『キューリー夫人伝』を読み了えたのでございます。純真、質素、謙讓
の美德を経とし、不屈不撓の精神と歴史的大事業の完成を緯とした物語ですから、読む者ひとし
く感激するのが当然といえ、ばい、ものの、これが一昔前のことだったら、修身の先生のお説教を
聞かされた時の気持がして、あたり一円八十銭の本代を払う奴はなかつたらうと思われま。そ
れもこれも時勢——時勢の力ほど、偉大なものではございません。

それはさておき、私が『キューリー夫人伝』を読みました、二三日後のことでございました。

勤めから、腹を減らして帰ってきていつもの如く、白雲荘アパート十六号室の扉を開けますと、今日は仕事にアブれたのか、わが妻はフダン着のままで部屋に寝転び、ピーナッツの袋に手を突込みながら、しきりにボリボリと頬張ってる様子でありましたが、私の顔を見るや、

「あんたッ」

と、畳の上にひざまずき、両手を胸のあたりに当てて、長い吐息を洩らしました。外国映画の女優は、感激の場面に、よくこんな仕草を致します。

「おい、どうしたんだ。シツカリしなさい」

「どうもこうも、ありアしないわよ、あたし、もう断然、今日から料簡を入れ替えるわよ」

と万里子は、眼の色を変えています。わが妻ながら、平常から決して模範的な夫人とは申されないので、料簡を入れ替えるという以上、私に不利益はないに決ってます。

「それは結構なことだが、なんでまた、急にそんな気になったんだね」

「これよ」

「これとは、なんだい」

「まア、あんたもカンの悪い男ね。大きな眼開いて、見たらいいじゃないの」

と、指す方を見ると、ピーナッツの袋と列んだ、『キュウリー夫人伝』が裏返しになっています。

「なんだ、それか」

「なんだとは、なに？　こんな素晴らしい、感心な……セイセイする……慈善鍋へ五円入れちまつたような気持のする小説が、今までにあつて？」

「小説じゃないよ、伝記だよ」

「どっちだって、おんなじことよ。あア、なんて美しい物語……なんて崇高な女性……」

と、万里子は、彼女がまだ喫茶店のレコード係であつた時代を憶い出させるように、ウットリと、純真な眼つきを見せました。

「実ア、僕もあの本には、魅せられたんだがね。しかし……だいぶ腹が減ってるから、早く飯にして貰いたいな」

「うるさいわね。ご飯なんて、一度や二度喰べなくなつてなによ……あたしはあの本に感激しちゃつて、お午飯^{ひるめし}抜きで読んだのよ」

だが、ピーナッツをそれくらい喰べれば——といったかったが、止めにしました。私は彼女に逆らつて、トクをしたことは一度もないのです。

「あたしね。今日お茶を挽いちゃって、家へ帰ってくると、あんたの机の上にこの本があるのでしよう……退屈凌ぎに読み始めてみたら、もう止められなくなっちゃって……。あア、いい本だわねえ。あたし、魂を根こそぎ揺すぶられたみたい」

と、まだ眼を細くして、溜息をついています。

「それはわかったが、これから料簡を入れ替えるというのは？」

「世の中には、キュウリー夫人のような淨い、立派な、感心な妻があると知ったら、あたしもグズグズしちゃアられない気持ちになったのよ。あたしも今日限り、断然過去を清算するわ。あんたにも、ずいぶんわがままばかりいって、済まなかったわね。許してね。あたしだって、根から悪い女じゃないのよ」

「知ってるよ。ただ、少しばかり自制力が足りないだけさ」

「いいえ、少しばかりじゃないの。実際、自分でも悪妻だと思うことあるわ。あんたがあんまり温和しいもんだから、つい凶に乗ったのよ……悪かったわ」

と、声まで潤んで、万里子は改悛の色を表すのです。私は夢かと疑うほど、嬉しくなりました。ほんとにわがままと放恣さえ慎んでくれたら、こんないい女房はまたとないと思っただけです。

（定価一円八十銭は、安かったよ。こんな効験があると知ったら、もっと早くあの本を買うんだ）と、私は腹の中で思いました。

「そうそう……あんたお腹がすいたでしょうね。でも、何にも支度がしてないのよ。今日だけは、うどんカケで許して下さらない？」

「あア、いいとも、その本を読んで、支度を忘れたんだから我慢するよ」

「ほんとに、ご免遊ばせね」

と、言葉使いまで改まって、万里子は階下へ、電話をかけに行きました。

やがて、ソバ屋の出前持が現われてきて、二人は新年のように改まった気持で、餉台に向いました。

万里子は、極めて淑やかに、うどんカケを喰べていましたが、やがて箸を置き、

「ねえ、あんた、似てるわね」

「なにがだよ」

「キューリー夫婦と、あたし達」

「えッ」

これには、私も一方ならず驚きました。どう考えたって、あの人類の模範的夫婦と、私達二人